

## 【書評論文】

### 舘岡洋子編『日本語教育のための質的研究 入門—学習・教師・教室をいかに描くか—』

Tateoka Yōko (Ed.) “Nihongo Kyōiku no Tame no Shitsuteki Kenkyū Nyūmon : Gakushū / Kyōshi / Kyōshitsu o Ikani Egaku ka”

古屋 憲章<sup>①</sup>

早稲田大学大学院日本語教育研究科 D4

舘岡洋子編 (2015) 『日本語教育のための質的研究 入門—学習・教師・教室をいかに描くか—』 ココ出版、408 頁、ISBN 978-4-904595-68-8、定価 2,400 円＋税)

本稿において書評の対象となる舘岡編 (2015) は、日本語教育界初の日本語教育をフィールドとする質的研究に関する入門書である。

日本語教育研究においては、現在、次の三つのタイプの研究が混在している。

	タイプ 1	タイプ 2	タイプ 3
研究対象	日本語（音声、語彙、文法、談話・文章等）	普遍的なヒト	多様な個人・場
背景となる学問分野	言語学（日本語学）	第二言語習得研究、実験心理学	社会学、人類学、質的心理学等、多様な分野
研究方法	量的研究	量的研究	質的研究

タイプ 1 は、1980 年代以前から行われている日本語を対象とする「言語学で得られた知見（理論）を日本語教育に応用する」（舘岡，2015，p.14）ための研究である。タイプ 2 は、1980 年代後半から行われている普遍的なヒト

---

<sup>①</sup> e-mail : frynrak@gmail.com

(主に日本語学習者)を対象とする「第二言語習得研究や心理学で得られた理論を実践に応用する」(館岡, 2015, p.14)のための研究である。タイプ3は、2000年代以降行われている多様な個人(日本語教師、移動する子ども、外国人介護福祉候補者等)や場(学校の教室、地域のボランティア教室等)を対象とする実践研究である。タイプ1、タイプ2は、量的研究になる場合が多い。なぜなら、対象が言語であれ、普遍的なヒトであれ、いずれも普遍的な理論を構築することが研究の目的だからである。一方、タイプ3は、質的研究になることが多い。なぜなら、特定の日本語教育のフィールドから生まれたローカルな理論を記述することが研究の目的だからである。

館岡編(2015)では、(タイプ3に示したように)近年盛んになって来ている日本語教育における質的研究に関し、その理念、背景、および事例が紹介されている。本書は3部構成になっている。第1部「日本語教育における質的研究—今、なぜ質的研究なのか—」では、主に質的論文に対して抱かれる「客観的ではないのではないのか」といった疑問に関するディスカッションが行われている。第2部「個をとらえる質的研究」、第3部「場をとらえる質的研究」では、それぞれ執筆者がどのように質的研究を展開していったかが描かれている。

館岡編(2015)は、日本語教育における質的研究に関し、次のように述べている。

質的研究を行うということは、フィールドのデータをある決まった手順にしたがって処理していくといった「やり方」だけを指しているのではないということです。何をめざして何のために研究をするのか、自らがフィールドをどう捉えるのか、見たいものは何かという問いに対して、自分自身が工夫して「方法」を生み出していくものではないかと思います。(館岡, 2015, p. iv)

確かに館岡編(2015)では、M-GTA、PAC分析、SCAT、ライフストーリー、

エスノグラフィー、会話分析といった様々な質的研究手法が紹介されている。しかしながら、本書は質的研究の「やり方」を学ぶ書ではない。各執筆者（＝日本語教師）がどのように自身のフィールドを記述し、公開したかというストーリーをもとに、読者自身が自らのフィールドをどのように記述し、公開するかを考えるための書である。そのため、本書では、各執筆者の質的研究をめぐる試行錯誤と葛藤のプロセスを一人称により時系列で語られている。これにより読者は、各執筆者にとっての質的研究を各執筆者の視点で追体験することができる。

あなたが自身の日本語教育のフィールド（学習・教師・教室）を記述し、公開してみたいと切に願うのであれば、質的研究は必ずその支えになるはずである。そして、あなたが実際に質的研究により自身のフィールドを記述・公開しようとする際、本書で詳細に描かれている「執筆者たちがそれぞれのフィールドで取り組んだ実践研究のプロセス」（館岡編，2015，p.iv）が、よきガイドとなってくれるはずである。